# 異世界共演乱舞

kou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界共演乱舞

【Ｎコード】
Ｎ２９５８ＢＡ

【作者名】
ｋｏｕ

【あらすじ】
狂乱家族日記、ＢＬＥＡＣＨ、スレイヤーズ、魔術士オーフェン、おざなりダンジョン、ＢＥＮ１０、魔法陣グルグルの好きな話をコラボさせた物語。
ひょんな事から出会った出会うはずのない出会い。そして、出会った謎の少年、クウ。彼は言う。
世界を救ってみないかと……。
神を名乗る者、死神の力をもつ人間。魔を滅する者、過去を捨てた男。旅をする者、ヒーローに憧れる者。勇者になったのんき者、夢

見る魔法使いが、出会う！！

## 序章～零～（前書き）

まったく趣味だけで作り始めた物語です。全部の原作を知らなくても楽しめるように作りました。見ていただけると、幸いです。

# 序章～零～

それは本来なら紡がれないはずの物語。
いつかあったかもしれない物語。
いつかあるかもしれない物語。
それは未来の出来事か、現在の出来事か、はたまた過去の出来事か……。
それは様々な過去を持ち、複雑に絡んだ宿命と運命に過去を持つ者達が集まり家族となった物語。
それはあの世とこの世を渡り己の信念のために刃を振るう物語。
そこは赤い竜神と赤い魔王が戦う世界を旅する魔を滅する者と呼ばれる者の物語。
そこは魔法を奪い魔術を手にした竜とその混血である魔術士が存在する世界の物語。
これは魔法と剣の世界で自由気ままに力尽くで旅する女剣士の物語。
これは異星人に姿を変えることが出来る装置を手にした少年の物語。
そして魔王を倒すために旅をする魔法使いと勇者の物語。
それらが、ある一つの失敗から数多の世界を旅して放浪する事となった少年の物語によって、入り交じり紡がれる物語。
本来ならあるはずのない物語。けれどそれは生まれた物語。そして、作られた物語。
それは語られる。物語……。

## 序章～零～（後書き）

序章と言う事からキャラの一人も出ていません。こんな始まりですが、ごひいきにしていただけると嬉しいです。

## 序章　～今さら世界の危機とか言われても……～（前書き）

スレイヤーズから始まります。アニメと原作を混ぜた感じです。本編終了後、一年たっています。リナは故郷に帰って居ましたが、またガウリイと共に旅に出てセイルーンに来ました。

## 序章　～今さら世界の危機とか言われても……～

「世界の危機なんです」
「何も今さら……」
力一杯宣言するアメリアの言葉に、あたしは思わずうめいていた。
聖王都セイルーン。その王室の一室であたしは久しぶりの相手と再開していた。
「今さら世界の危機とか言われても……」
あたしはそう言ってアメリアを見る。セイルーンの王位第一継承者、フィリオネル殿下の第二息女、アメリア。立派な王族なのだが、正義バカの鋼鉄娘だ。
黒い艶やかな髪に小柄な体躯に愛らしい顔立ち。元気いっぱいの天真爛漫な娘。
「第一、二年前に魔王が復活。その後、反抗した偽賢者の暴走。さらに魔竜王ガーウと冥王フェブリゾの陰謀。さらに、異界の魔王の降臨。ザナッファーの復活に魔王の亡霊。果ては覇王の策略にデーモン大量発生事件……。どう考えても、二年間で八回は世界が滅びかけていたわよ」
「そんな事あったか」
「あんたも関わったでしょうが！」
隣にいたガウリイの言葉にあたしはスリッパで叩く。
金髪碧眼の美青年。剣の腕も一流の剣士なのだが、脳みそは残念な事に解けたアイスで出来ている。これでも一応、あたしの保護者である。ま、自称なのだが……。
「つか、そんなに騒動に巻き込まれていたのか」
あきれたように言うのはゼルガディス。鋼の髪に岩のような肌。端正な顔立ちなのだが、人間では無い事はあきらかである。魔道剣士である事情から、キメラとなった青年である。
「好きで巻き込まれたわけじゃ無いわよ！」

あたしは怒鳴る。
「とにかく、世界の危機なんです！」
「どう言うことよ？」
「実は、神託があったんです」
「選択？」
アメリアの言葉にガウリィが小首をかしげる。
「神託よ」
神託。巫女や神官が時折、発動させる能力だ。本来なら知る事のないことを知る事が出来る能力で、それは真実である。ま、自由に制御できる能力ではないのだ。具体的に言えば、国の滅亡に関わる問題に頭を悩ませて居る中で、ふとお風呂で明日の天気が神託される。その可能性もあるのだ。
ま、これは極端だが……。
それに神託によって右往左往されることもある。神託によって滅びると知った竜族が滅びる原因となる竜族を滅ぼそうとした。だが、それこそが滅びる原因となったのだ。
「実は、こんな神託があるんです」
アメリはそう言うと語り始めた。

異界が混じり合い混沌が生まれん。その時、出会うのは世界を消滅の危機から救うもの。
狂乱を生み出し宴を呼ぶ死を呼ぶ宝に宿りし常闇の白き炎から産まれし神を名乗る存在。
現世と冥府のバランスを司りし存在と生きる存在の血を引く月の名を持つ刃を持つ存在。
暁よりも眩い存在、黄昏よりも暗き存在が居る世界に来る黄昏時を退けし、金色の闇を知る存在。
緑の瞳を持つ竜族と天人の異名を持つ者と人の混血で鋼の後継者の存在。
凶王の証を持ち自由に旅する魔力の剣を持つ剣士。

数多の姿に変わる腕輪を持つ少年。
幸運の星に護られた世界を救う光の者と夢見る神の踊り子。
その者達が緑と茶と白い来訪者の導かれる。
さすれば世界は正しき姿を取り戻す

「――と、いう神託なんです」
アメリアの言葉にあたしは眉をひそめてつぶやく。
「意味不明ね。ただし、金色の闇を知る存在と言うと……」
「ロードオブナイトメアか……」
ゼルの言葉にあたしは頷く。
金色の闇と言う異名を持つ魔王を越えた魔王。その存在を知るのは限られている。それに黄昏……それは魔王シャブラニグドゥの事だ。すなわち、
「魔王を倒した金色の魔王を知る存在。それは」
「お前の事だな。リナ」
あたしの言葉にゼルが冷たく言う。
「なんであたしの周りに世界の危機が現れるのよ?」
「知らん」
思わずつぶやいた言葉にゼルが冷たく言う。
「それに、他の面子とかわからないことだらけじゃないの。
それに世界を救ってなんの得があるのよ」
「リナさん。言っておきますが、この神託はスイフィードナイトが受けたものですよ」
びききぃ！
アメリアの言葉にあたしとガウリイが硬直した。
スイフィードナイト。すなわち、あたしの姉ちゃん。
あたしの顔から血の気が引き、となりのガウリイが震える。
「お姉さんからの伝言です。良いからやれ。さもなきゃ、お仕置き。だそうです」
がたりあたしは立ち上がり宣言する。

「行くわよ！　ガウリイ！　お仕置きから逃げる……もとい、世界の危機を救うわよ」
「おお！　ルナさんからのお仕置きから逃れ……もとい、世界の危機は見過ごせないな」
同じく頷くガウリイ。
さもしいとは言う事無かれ、故郷の姉ちゃんは恐ろしいのだ。

「で、どこに行けと言うのよ」
気を取り直したあたしはそう尋ねる。
「大丈夫です。正義があれば何とかなります」
「なにそれ？」
ようするにわかってないらしい。そこに、
「どうやら、お困りのようですねぇ」
と、聞き慣れた声が聞こえた。

## 序章　～厄介な事になってきた～（前書き）

ようやっと動き出しました。映画版のキャラクターも出たりします。
まあ、わかる人にしかわからないかもしれませんが……。

## 序章　～厄介な事になってきた～

声と共に現れたのは、ゼロスだった。一見すると、おかっぱ頭の柔和な笑みを浮かべて青年にしか見えない。ただし、その正体は破壊のために破壊し、滅びのために滅びをもたらす存在、魔族。それも、その中でもトップクラスの実力を持つ獣神官、ゼロス。

人類の天敵と言っても過言じゃない。まあ、因縁というかふしぎな縁で知り合いなのだが……。

「で、なんであんたが出てくるのよ……」

「いやー。アメリアさんとほとんど同じ内容ですよ。魔王様もそのような話を持ってきましてね。僕らとしても調査することになったんです。それで、リナさんが関わっているならリナさんの事をよく知っている僕に尋ねる事になったんです」

「なるほどね……。厄介な事になっているみたいね」

あたしは眉をひそめる。

「あんたが関わっているなんて、厄介な事としか思えないわよ」

「そんな事、言わないでくださいよ。情報を持ってきたんですよ。なにかを厄介な事が起きている場所がわかりましたよ」

その言葉に、全員が沈黙する。はっきり言ってゼロスは信用出来ない。

けれどこいつは嘘は言わないのだ。嘘は……。

「一つ、質問。あんたは何を考えて居るの？」

「それは秘密です」

あたしの質問に、ゼロスはおきまりの答えを返したのだった。

結局、あたし達はゼロスと一緒にそこに向かう事になった。そこは、かつて異界の魔王ダークスターが降臨した場所だった。あの時、ダークスターが現れた結果、そこは吹っ飛んだはずだったのだが……。

「こりゃまた……悪趣味ね……」
あたしは辺りを見回してつぶやく。ゼロスの空間移動で、来たのは良いのだが……。かなり悪趣味な光景が広がっていた。
乾いた血の色に染まった塔。そこで不気味な魔法陣が描かれている。
「なあ、あれはなんだ？」
「さあ、なんでしょうね」
ガウリイの質問にゼロスは笑みを浮かべて尋ねる。
その言葉にあたしは眉をひそめて尋ねる。
「とにかく、ろくでもないものだということは間違いなさそうですよ」
「わかんないの？」
「それは、秘密です」
……。こいつ……。
殺意を感じていると、
「なんだぁ。お前ら」
どこか軽薄な声が聞こえた。そして現れたのは、一人の男だった。
白髪に黒い布を体全体に巻いた男。だが、不気味なことに血の色をした鎖が体から生えている。
「そういうあんたこそ、なにものよ？」
あたしは構えて尋ねる。その手にしているのは、独特のデザインをした黒い剣。
その身から発せられるのは尋常じゃない邪気と殺気。こいつ……本当になにものだ？
「あんた魔族？」
「いいや。俺は咎人（とがびと）だ」
咎人？
あたしはその言葉に眉をひそめる。
「なあ。それって喰えるのか？」
「食いもんじゃねえよ」

ガウリイの言葉に怒鳴る咎人。
「ま、いいや。死ね」
そう言うとそれは襲いかかる。とっさに後ろに下がるが、――早い！
ガキィィン！
ガウリイがとっさにその刃を受け止める。
「どうやら、お前さんは敵みたいだな」
「まあな。しかし、なかなか強いな。死神並に強いかもな」
死神？　その言葉にガウリイは眉をひそめる。そこに、
「「エルメキアランス」」
アメリアとゼルの呪文が響く。それによけて、扉に近づく。
そこに、あたしの呪文が響き渡る。
「黄昏よりも暗きもの血の流れより紅きもの、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我ここに汝に誓う、我ここに汝に願う。我らが前に立ちふさがりし、全ての愚かなる存在に我と汝の力持て、等しく滅びを与えんことを！」
魔力が凝縮し手のひらに集まる。
「ドラグスレイブ！」
この世界の魔王、シャブラニグドゥの力を借りた最大の攻撃魔法が炸裂する。
チュドオォォォン！　派手な爆音が響き、咎人は吹っ飛んだ。
だがその時だった。
ぎぎぎぎぎ……。まるで地獄から響いてくるような音がした。
音がする方を見ると、魔法陣から紫色の光が発せられていた。
「なっ――」
絶句しているあたし達を無視してそれは動き出す。
やがて放たれた紫色の光は、あたし達を飲み込んだのだった。

## 序章　～厄介な事になってきた～（後書き）

キャラクター説明

ゼロス　リナの知り合い。ただし仲間ではない。嘘は言わないが平気で人を騙す存在。口癖はそれは、秘密です。あだ名は生ゴミ、パシリ魔族、ゴキブリなど……。

？？？　謎の存在。自称、咎人。ＢＬＥＡＣＨの映画版に登場しました。小説版しか呼んでいないので、しゃべり方とかがおかしいかもしれません。

次回から、スレイヤーズ以外のキャラクターが出ます。

## 序章　～懐かしくなんかないんだぞ～（前書き）

さて、ようやっとスレイヤーズ以外のキャラを出せました。
オーフェン、ＢＬＥＡＣＨ、狂乱家族日記ファンの方々お待たせしました。
ちなみに、オーフェンは第一部終了後。
ＢＬＥＡＣＨは死神代行消失編の終了後。
狂乱家族日記は本編終了、一年後です。
楽しんでください。ちなみに、スレイヤーズＶＳオーフェンという作品から、リナとオーフェンは昔、会ったことがあります。

## 序章　～懐かしくなんかないんだぞ～

目を開けたらそこは、森だった。
「ガウリイ！」
起き上がるが誰も居ない。
「ガウリイ！　アメリア！　ゼル！　……ゼロス？」
名前を呼んでも誰一人として、返事をしない。なにが起きたんだ？
あたしは眉をひそめつつ、起き上がる。そこに、
「誰か居るのか？」
ずきり……。脳裏に痛みと妙な光景が浮かぶ声が聞こえた。あたしは声がした方を向く、するとそこに一人の青年が現れた。
その瞬間に、記憶がフラッシュバックする。

霧の町――異世界――そこで、出会った『魔術士』

彼は記憶のままだった。黒い髪の毛ににらみ付けるような三白眼、病的な印象すら感じるほどの黒ずくめ……。
「……オーフェン……」
「リナ……？」
彼もあたしの顔を見て驚いた表情を浮かべる。
なんで……なんで……。
「なんであんたが……」
「……なんでお前が」
「「ここに居るんだ？」」
声は重なり合う。
あたしは思い出す。
彼はオーフェン。異世界の魔術士という存在だ。呪文を唱えず力ある言葉だけで魔法を使う存在。
かつて異世界の神っぽいものに召喚された際に、共闘した相手だ。

だが、忘れていた。
　いや、忘れさせられていた。異世界の記憶を持ち込むのは危険だから……。そのはずだった。
「……ここは、お前の世界か？」
「さあね。紫色の光を浴びて……その後、気がついたらここにいたの？　と、言うかそんな質問をするという事はここはあなたの世界じゃないの？」
「俺もお前と同じだ。気がつけば、ここにいた」
　あたしの質問にオーフェンは不機嫌そうに答える。
「紫色の光をあびてな……」
「そう……」
　あたしは考える。あの時、聞いた神託にあった言葉、魔術士。それはオーフェンのような術者すなわち、異世界の魔術士を差していたのではないのだろうか？
「オーフェン。鋼の後継者とか言うのを知っている？」
「……なんでお前がその名を知っている？」
　あたしの言葉にオーフェンはいっそう不快そうに眼を細める。ただでさえ、目つきの悪い目がさらに険悪な者になる。
「歩きながら説明するわ」
　あたしは静かにそう言った。

「……と、いうわけよ」
「なるほどな……。鋼の後継者……。大陸でも最強と呼ばれた魔術士の弟子の一人につけられた異名だ」
　あたしの説明にオーフェンは納得したように言う。
「知り合い？」
「なんでそう思う？」
　あたしの質問にオーフェンは先ほどよりも、多少はましになったが相変わらず険悪なまなざしで尋ねる。
「鋼の後継者の話題でそれだけ感情をあらわにされるとね」

「……捨てた過去の名だ」
オーフェンはぶっきらぼうに説明する。捨てた……すなわち、オーフェンが鋼の後継者か……。とはいえ、
「ま。過去に何があったかなんて聞かないわ。異世界の事にまで首を突っ込むわけにも行かないからね」
あたしはそう言うとオーフェンは黙って少しだけ頭を下げた。
「しかし、困ったものね」
「まったくだ。わからないことだらけだからな」
あたしの言葉にオーフェンは頷きながら、
「なら、やっぱり質問するしかないよな。たとえば、先ほどから俺らを見ている奴とかな」
「そうよねぇ……」
そういうとあたし達は立ち止まり、気配がする頭上をにらみ付けて叫ぶ。
「ちょっと、隠れていないで出てきたら動なの？」
「出てこないなら、ちょっと痛い思いをする事になるぜ」
「気づいていたのかよ……」
あたしとオーフェンの言葉にそれは表れた。オーフェンと同じように漆黒の服だが、まるで一枚の布だけで作られたような服だ。その手には、同じように黒々とした身の丈ほどの刃。
オレンジ色の髪の毛だけが目立つ。
とはいえ、年の頃はどう見ても少年に近い。あたしと同い年ぐらいだろう。
「あんたなにもの？　見たところ普通の人間じゃなさそうだけれど？」
あたしの質問に少年はたれ目だが眉間にしわを寄せた目で言う。
「俺は……死神代行（しがみだいこう）……黒崎一護（くろさきいちご）」
「「死神代行？」」
妙な呼び名にあたしとオーフェンは眉をひそめる。
「お前ら、なにものだ？　死神じゃないみたいだが？」

「ま、ドラまただの盗賊殺しだの破壊魔とか呼ばれているけれど……。死神と呼ばれては居ないとおもうわよ……」
「俺は暗殺者だった事もあるが、死神とは呼ばれていないな」
一護となのる少年の質問に、あたしはそう答える。
「ところで、あんたセイルーンとかゼフィーリアって知っている？」
「キエサルヒルマでも良いぜ」
オーフェンの言葉に一護は眉をひそめる。
「ああ？　どこだよ。お前ら、外国人か？　それにしては、随分と日本語が達者だな」
その言葉にあたしとオーフェンは顔を見合わせて眉をひそめる。
「なるほどね……」
「なにがなるほどなんだ？」
あたしの言葉に一護は不機嫌そうに聞き返す。
「たぶん、あんたはあたし達と違う世界の住人よ」
あたしがそう言うと一護はしばらく考えた後、
「……お前ら、死んでいるのか？」
「「勝手に殺すなぁぁぁ！」」
失礼な言いようにあたしとオーフェンはすぐさま、一護を蹴っ飛ばした。

「……と、言う訳よ」
だいたいの説明を終えれば一護は納得したように頷いた。
「ああ、まあ、わかった。けれど、信じられないな」
「信じなくても結構よ。けれど、目の前の出来事までは否定しないでね」
あたしの言葉に一護は苦笑を浮かべる。
「そうだな。俺だってずいぶんと非常識な出来事を味わった。異世界があってもおかしくないな」
理解が早くて良いことだ。
あたしは肩をすくめる。

「とにかく、あたしはリナよ」
「俺はオーフェンだ」
自己紹介をすると一護は黙礼する。その目にはいまだ、警戒していることをありありと表現している。
「さてと……あんたも同じように紫色の光を浴びたみたいね」
「とにかく、人が居る場所にでも捜すか？」
あたしの言葉にオーフェンはそういう。そこに、
「なるほどな……。随分と情報に詳しいようだな」
そんな少女の声がした。
声がする方を見ると、木の上に一人の少女が居た。
一目で初対面だと確信する。
青い髪の毛に宝石のように輝く緑色の瞳。だが何より特筆すべきなのは……、
「ネコ耳……」
「ネコ耳だな」
「ネコ耳だ」
神と同系色の青い猫の耳。そして同じ色の尻尾。年の頃なら、十二から十五だろう。
「凶華様も同じだ。同じように紫色の光を浴びてここにいた？
貴様等はずいぶんと詳しいようだな」
凶華はそう言うと、飛び降りる。まるで猫のような身体能力に、猫のような笑み。
「お前はなんだよ」
オーフェンの質問にネコ耳少女は笑みを浮かべて名乗る。
「凶華（きょうか）だ。乱崎凶華（みだれざききょうか）様だ。
ちなみに、凶華様が居る世界には大日本帝国が存在しているぞ」
「大日本帝国？　マジで異世界だな」
凶華の言葉に一護は怪訝な声を発する。
随分と凶華は不敵な笑みを浮かべながら言う。
「なかなか、面白そうだな。とはいえ、今のところ不愉快以外、な

んでも無いがな」
どこか面白そうにけれど不機嫌そうにも凶華は言った。
そこに、
「ここにおられましたか」
高くもない低くもない男性とも女性とも思えない声が発せられた。そちらの方を見ると、そこには一人の青年が居た。中肉中背のすれ違っても誰も気づかないような特徴のない男。
唯一の特徴は、その身にまとっているマント。緑色の石に茶色い布がシンプルだがおしゃれにも感じさせる。
「あんた……なにもの」
まったく気配を感じさせなかった。凶華の方は、一護の気配で打ち消されていたのかと思ったのだが……。
「初めまして……。あなた方の現状を教える存在。マントと申します」
「マントね……」
青年の名乗りにあたしは眉をひそめる。どう考えても偽名とわかる名前だ。
「変な名前だな」
「孤児(オーフェン)と言う名前のあなたに言われる筋合いはありませんよ」
オーフェンの言葉にマントは不快そうに言う。
「そんな事より、今、何が起きて言えるか知りたくありませんか？あなたたちの命、そしてあなたたちの家族、ご友人、お仲間の命にも関係しますよ」
「「「「……」」」」
マントの言葉にあたし達は顔を見合わせる。
「ま、この際、あんたの言うとおりに動いてやろうじゃないの」
あたしはそう言うと、
「ま、他に方法もないしな」
「仲間の命とか言われると無視できないしな」
「ま、良いだろう。きさまは信用出来ないが、利用させてもらう」

オーフェンに一護、そして凶華はそう言った。

かくしてあたしは出会った。鋼の後継者、死神代行、狂乱の神。

けれど、まだまだ出会うとんでもない異世界の存在に……。

## 序章　～懐かしくなんかないんだぞ～（後書き）

オリジナルキャラクターが出たのでオリジナルキャラクターについて説明します。

マント　緑色の石と茶色い布をつけたマントを身につけている特徴のない青年。無機質で機械的なしゃべり方をする。その正体は……

以下は、作中で説明。

## 序章　～なりゆきメシア～（前書き）

さて、序章、出会い編はこれで終了です。まあ、とにかく主役達はなんとか出しました。この後、いろいろ冒険をして行くはずです。

## 序章　～なりゆきメシア～

「るー！　マント。遅いよー」

マントに案内されたどり着いた先に居たのは五人の人影だった。

その中でマントの名を呼んだのは、白い少女だった。色素が全くないに近い、白い肌に白い髪。ただ透けるような青空のような青い瞳。着ている服はかなり乙女チックだが雰囲気から性格からか、似合ってる。

「どうやら、ちゃんと集める事が出来たようですね。レビ」

白い少女をマントはレビと呼んだ。となると、後ろにいる四人がレビの集めていた異世界の面子だろう。

白い剣を持った一人の剣士。エルフのようにとがった耳に露出の高い服。とはいえ、露出が高いと言ってもどこぞの女魔道士とは違う。野性的という印象を感じさせる。金髪の中に赤い髪が筋となっている。

その周りにいるのは、まだ子供のように見える。一人は、茶髪に緑色の瞳をした十歳前後の少年。腕につけている黒い腕輪だけが妙に物々しい印象を感じるが他は、ちょっと生意気そうだがごく平凡な印象を感じる。その少年よりやや年上のは、金髪に赤いバンダナをしたとぼけた印象を与える少年。その少年に隠れるようにいるのは、同年代ほどの三つ編みをした黒いローブに太陽に目玉をかいたような杖を持つ少女。

「それでは、ご案内しましょう。リナさん。オーフェンさん。一護さん、凶華さん。ニケさん、ククリさん。モカさん、ベンさん」

マントと名乗るその人物は、そう笑みを浮かべてそう言った。

案内されたそこは、無駄のないだが趣味がよいと感じるような部屋だった。その部屋の中央にある大きな机。そこには所狭しと、料理が並んでいる。尾行をくすぐる香織は食欲をくすぐる。

そこに居るのは、一人の少年だった。年の頃なら、あたしよりやや下と言ったところだろう。
自然の森にある青々とした緑色の髪と無関心と言う印象を与えるような灰色の瞳をしている。
「初めまして。トレジャーハンタークウだ」
「どうも。リナ＝インバースよ」
「オーフェンだ」
「黒崎一護」
「凶華様だ」
座ったまま名乗るクウにあたしとオーフェンに一護、凶華が名乗る。
その後を追うように女剣士が名を名乗る。
「モカや」
それを皮切りに、
「ベン。ベンジャミン＝テニスン」
と、茶髪の少年が名乗り、その後を金髪の少年が名乗る。
「ニケ」
「あ、ククリです」
最後に少女が名乗る。
「知っている。ま、座ってくれ。飯も勝手に食え。味は保証するぞ」
ぶっきらぼうに言うクウ。
あたしは黙って椅子に座り目の前のスープを口にする。
うむ……。怪しい薬は入っていないようだ。故郷の姉ちゃんからしごかれて、ゆっくりと味わえば毒が入っているかは言ってないのかわかるのだ。毒が入っている味ではない。
むしろ、おいしい方だ。
「それで、クウ。きさまはなにものだ？」
骨付き肉をかぶりつきながら凶華が尋ねる。……こいつ、毒が入っているかもしれないと考えて居ないのだろうか？
「ま、トレジャーハンターだ。とか、クウだ。他にもいろいろ言え

るが、お前らにの疑問に対するぴったりの質問の答えはこれかな？」
クウはそう言うと、笑みを浮かべて言った。
「この世界が崩壊する原因さ」
……。
「は？」
思わぬ言葉にあたしは怪訝な顔をする。全員も、いまいち理解できないという顔をしている。
まあ、無理がない。いきなり自分が世界を崩壊させようとしている原因です。そう言われて納得する人間なんてまず居ない。
「とまどうのは無理がないな。順を追って説明してやるよ」
クウはそう言うとミートパイを食べながら説明を始めた。

世界というのは無限にあるらしい。一つの空間に、複数の世界がある。そして、空間の外にはまた別の空間がありその中に、別の世界がある。
そのすべての世界を凝縮している力の固まりがある。それが時空間の宝珠と呼ばれる品だ。
それを本来、制御するのが守護神獣と呼ばれる存在だった。だが、その守護神獣は今は赤子なので封印されていた。ところが、ある少年がその封印を解いてしまった。
解放された宝玉は数多の世界を飛び回り、その無限に近いパワーを手にした者に与える。一つの世界に収まりきらない巨大な力は、ありとあらゆる出来事を起こしやがて世界を消滅へと誘う。
その宝玉が偶然、世界と世界が重なったところを鋭く貫いたのだ。その結果、巨大な力により複数の世界が重なり混ざった。それによって生まれた存在が、すべての世界を混ぜることを企んだ。
「――と、いうわけだ」
クウと名乗る少年は、そう語り終えると紅茶を口にする。
「なるほどな。その話が本当なら、たしかに世界の危機かもしれん

な」
クウの説明を聞いて凶華は面白くなさそうに言う。
「と、言うか大変じゃないか！」
そう言って慌てるベン。だが、それをオーフェンが制止する。
「だが、おかしな所があるだろ。なんで、お前がそんな事を知っている？」
その言葉にクウは自嘲気味な笑みを浮かべる。
「なに、たいした事じゃない。封印を解いてしまったのが、俺なのさ」
「「「「「「「「「って、お前が元凶か！」」」」」」」」」」
全員の言葉が見事にハモる。
「だから、俺は宝珠が起こす事件を解決し、世界を元に戻すために旅をしている。
もちろん、宝珠の回収も俺の役目だ」
「そして、そのサポートとしてそばに居るのが私とレビです。ですが、今回の件はかなりの異常事態なのです。そのため、あなた方のご協力をお願いしたいんです」
「つーわけで、世界を救ってみない？」
マントの言葉にクウは笑みを浮かべてそう言った。

「金は出すのか？」
「あんた、金を要求するのかよ？」
オーフェンの言葉に信じられないと言いたげに一護が言う。
「きれい事だけで腹はふくれないのさ」
「ま、そういう下世話なやつは嫌いじゃないぞ。現実的な問題だしな」
オーフェンの言葉に一護は笑って言う。
「調査中の調査費、食費、宿泊費、その他諸々全部、俺が面倒を見る。それに、お前らとしてもどうせこの状況では旅をするだろ。それの補佐もする」

「そんで、お前はなにをする気や？」
クウの言葉にモカはきっぱりとそう尋ねる。
「俺は俺で調査さ。宝珠を持った奴は俺を知っているからな。別行動を取らせてもらう。それに、お前がらは俺を信用していないだろ」
たしかに、クウを信用しているとは言わない。とはいえ、それは他の面子に対しても同じだ。
例外は、かつて知り合ったオーフェンだけだ。
「なんで、俺らに頼むんだ」
一護が悪い目つきで尋ねる。
「お前らがパンドラの箱だからな」
「オレ達ははこじゃねえぞ」
クウの言葉にニケが不快そうに言う。
「そういう意味じゃねえ。お前らは世界を大きく揺るがす力と知識に運命を持っている」
「どう言う意味よ？」
クウの言葉にあたしは眉をひそめる。
「さあな。お前達がこれまで進んできた物語。これから進む物語。それは、途方もない物語さ。
ただ、お前らという存在が敵に利用されると大変な事になる。ただそれだけだ」
……。
あたしたちの顔にクウは言う。
「数多の宇宙人に変身する装置、オムニトリックスを持った少年。ベン」
名を呼ばれベンはびくりと腕輪を触る。
「凶王サルバトルから剣術を学び、魔力を秘めた剣を手にしているモカ」
モカが腰に差した白い剣に手をかける。
「大陸最強の魔術士と謳われた男の十三人の弟子の一人、オーフェン」

ぎろりとオーフェンが鋭い目つきを更に鋭くさせる。
「魔王ギリを倒すために旅をしている光魔法の最高の魔法を使う勇者、ニケ。三百年前に魔王を封印した闇魔法の最高峰、グルグルを使えるミグミグ族、最後の一人、ククリ」
ニケとククリが顔を見合わせる。
「破壊神の子供として集められた家族の母親。その体は全ての命を吸収する。その精神は、全ての生きものを支配することすら可能な存在。凶華」
凶華が不愉快そうに刺身を口にする。
「死神の父親を持ち卓越した霊力を持つ死神代行、一護」
一護はだまって刀を手にする。
「金色の魔王の力を借りた呪文を知る魔王を過去、数回ほど滅ぼした魔道士、リナ」
なるほど……。ずいぶんと詳しく知っているようだ。
「世界を大きく動かす力と知識を持つ存在。そう言われても、仕方がないよな」
クウの言葉に辺りが沈黙する。それが、皇帝を意味していることは間違いなかった。

「ま、良いわよ。協力しておいてあげる。ただし、今のところは……。だけれど」
しばらくの沈黙の後にあたしは、そう言って笑みを浮かべる。
「ま、他にやることもないからな」
「とりあえずは、手を貸す」
「と、言うのが無難みたいやな」
「ま、良いんじゃねえの」
「よろしくお願いしまーす」
「よろしく」
あたしの言葉に口々に挨拶をする。
「それじゃあ、とりあえず金は渡しておく。いくらでも出てくるか

らな。
ただし、なくすなよ」
クウはそう言うと財布を放り投げる。
「それぞれの世界のそれぞれの通貨が入っている。それじゃあな」
そう言うとクウは立ち上がる。
「飯は食べてくれ。俺は、俺で調べるから」
クウはそれだけ言うとマントとレビを引き連れて立ち去ったのだった。

## 序章　～なりゆきメシア～（後書き）

序章、終了しました。ついでに、オリジナルキャラクターの説明です。

クウ　緑髪に灰色の瞳をした少年。人を食ったような意地の悪い性格をしており、マントやレビからはひねくれすぎてまっすぐひねくれた性格。自称、トレジャーハンターで、元凶。

レビ　クウと共に行動する少女。蒼い瞳以外は透けるような白い肌をした美少女。天真爛漫を絵に描いたような性格だが、無邪気さの中に達観した何かを持つ。

他にもいろいろ設定がありますが、それは作中で書こうと思います。

## 第一章　～一発触発の仲間？　怪しいやつらと危険な村～（前書き）

第一章開幕です。ちなみにこのストーリーはスレイヤーズ短編の番外、刃の先に見えるものを見た人ならいろいろ予測できる展開です。なので、展開がわかるなと言われてしまっても反論できません。けれど、リナ以外の面々が活躍できるようにがんばります。

## 第一章　～一発触発の仲間？　怪しいやつらと危険な村～

重い……。空気が重い。
森を抜けて道を歩きながら、あたしはそう思っていた。
あの後、料理を食べたあたし達はなりゆき上、一緒に行動していた。しかし、なんというか……。
空気が重い。
緊張と、疑いからかまったくといって良いほど会話がない。
オーフェンを見ると、オーフェンも居心地が悪そうだ。
しかし、困った。この状況は、はたしてどうすれば良いんだか……。
「と……」
そんな居心地の悪い沈黙を破ったのはニケだった。
「隣の家に囲いが出来たってね。格好いい（かこい）……」
……。
先ほどよりも重い沈黙が支配する。
「勇者さま……ウケないよ」
「塀の方が良かったかな？」
そういう問題じゃないと思うぞ……。
「……下らん」
凶華は興味なさそうにつぶやく。まあ、確かにしゃれとしてはかなり下らない分類だった。
そこんところを、下らないと言ってしまえばそうなのかもしれない。
「見てみい」
ふとそう言ってモカがある一点を指さした。そこには、
「村や」
たしかに、村があった。
「一つまず、情報収集でもするか？」

「ま、打倒かもね」
「反論する理由は無いな」
「……そうだな」
「行こう、行こう」
「ゴー！　ゴー！」
「ごー……」
モカの言葉にあたし達は口々にそう頷いた。

村は水晶にあふれていた。水晶の中に、眠るように閉じ込められている人々。
「どう言う状況だよ。これ……」
水晶を見て一護が不快そうに驚いた様子で言う。
「聞いたところだと……」
情報収集をしていたオーフェンが口を開く。
「あの紫色の光が放たれたとき、一部の人間は水晶に閉じ込められ眠りについているそうだ。
生きては居るそうだが、元に戻す方法はわからないままだそうだ」
「そうか……」
説明を聞いて一護は水晶を見る。
しかし、どうやらこの村は結構閉鎖的らしい。外から、人が来たのもかなり久しぶりなのであの光が起きた後、世界的にはどうなっているのかは不明。
「さてと……、この後どうする？」
すでに時間は夜遅い、
「宿に泊まる？」
「……そうだな」
オーフェンは頷く。全員、同感らしく反対意見も出ない。
あたし達は宿へと向かった。

村に旅人が来た。『わたし』が来てから訪れるとは不幸な連中だ。

どうやら魔道士が居るらしい。他にも変わった者達がいるが……。
どいつもこいつもなかなかの力を持っている。
ひょっとしたら、村人達だけでは返り討ちに遭うかもしれないが……。

なに、それも、余興だ。
しかし、あの魔道士……。『わたし』は、魔道士を見る。
栗毛色の髪をしたまだ若い魔道士だ。
栗毛色の若い娘の魔道士。そういえば、あの方が語った人間と同じ特徴だ。
……まさかな……。
一瞬、過ぎった妄想に『わたし』は、笑ってしまう。
それに、所詮は人間だ。『わたし』の敵ではない。
それは、他のやつらにも言える。
そう思っていると、猫の耳をはやしたひときわ、異質な娘がこちらを見た。
気づいたのか？
そう思っていると、娘が誰も居ないあばらやに入ってくる。
「……気のせいか？」
その娘は誰も居ないのをみて、眉をひそめる。そこに、
「凶華。行くぞ」
「呼び捨てにするな。たわけ」
呼びかけられ、娘はあばら屋を出る。
その様子を、『わたし』は、見ていた。

その宿は大きいとは言えない。おそらく村の中で大きくて使っていない部屋があるから、宿屋をやっていると言ったところだろう。
簡素なメニュー。
注文した品が来るのをあたしたちは待っていた。
しかし、沈黙が辺りを支配している。この沈黙、どうにか出来ないものか……。

「そういえば……」
ぽつりとモカが口を開いた。
「リナとオーフェンやっけ？　お前ら、同じ世界から来たんか？」
「違うわよ。ただ昔、ある世界で出会っただけよ」
あたしはそう言って肩をすくめる。
「そういう、あんた達は？」
「俺とククリは、同じ世界。他は、違う世界だ」
あたしの質問にニケがそう答える。そこに、
「少し、よろしいですかな？」
と声をかけられた。
そちらを見れば、そこには髭を伸ばした老人と三人程度の若者。
「あんたたちは？」
「わしはこの村の村長ですじゃ」
オーフェンの質問に老人、村長は名乗る。
「あんたがた、旅の傭兵か」
「……まあ、似たようなものかもね」
少なくともあたしは、腕に覚えはある。
「なら、その……頼みたいことがあるんですが……」
村長は言いにくそうにそう言ってきた。
「頼みたいこと？」
「はい。まだ、若いあなた方にこのような事を頼むのは大変、心苦しいのですが……」
村長はそう語り始めると注文した山菜のスープに焼いた川魚とパンが運ばれてきた。
「元々、この村は閉鎖的でして……。近くの山や川から木の実やキノコに山菜。川魚などで生計とたててておりました」
「はぁ」
この流れは、長くなるな。
あたしはそう思っていると、
「あ、お食事をしながらで良いですよ」

「そりゃ、どうも……」
そう言いながらニケはパンをかじる。
ククリも川魚をつつき、ニケもパンに手を伸ばす。
その様子を見ながらあたしもスプーンをてにする。
「そんなある日のことです。そう、あれは紫色の光が放たれる三日前でしたか……。
ちょうど、隣の夫婦に子供が生まれた日でした」
かなり長くなりそうだな。そう思いながら、あたしはスープを口にする。
山菜の独特の苦みと塩っ気。そして……、これは……。
「元々、小さな村なので子供は宝のような者でして……」
「きさま、その子供が生まれたのはなんの関係もないのではないのか？」
村長の言葉を皆まで言わせずに凶華は尋ねて、スープを口にしようとして、
「ちょっと、待った」
あたしは制止の声を発しながら布巾に口に含んだスープを吐き出す。
「話の途中で悪いけれど、このスープは食べない方が良いわよ」
びくりと村長が震えた。
「な、なにを……」
「シャヴェリルの実。猛毒が入っているわ」
その言葉に、スープを飲もうとしていたベンがスプーンごと手を離す。
「そ、そんな証拠は……」
「あたし、ゆっくりと味わえば毒が入っているかそうじゃないかわかるの」
「マジで？」
ニケが驚嘆の声を上げる。
「故郷の姉ちゃん仕込まれたのよ」

「……どんな姉貴だよ」
あたしの言葉に一護があきれたようにつぶやいたのが聞こえた。
いや、まあ……。それはさておいて、
「とにかく、違うというなら……このスープ。あんたがまず飲んでみてよ」
そう言ってあたしはスープを皿ごと差し出す。
沈黙があたりを支配する。
そして、
「村のためじゃ……。許せ」
そう言うと同時に村長が言った途端に、後ろに控えていた若者達が襲いかかる。
「「「許すか！　ぼけ」」」
あたしとオーフェン、そしてモカの声がハモり三人手テーブルごと吹っ飛ばす。
「スープに毒が入っていたという事は宿の連中も仲間か」
「ちっ、逃げるぞ」
凶華の言葉に一護はそう言うと、ベンとニケにククリの手を掴み走り出す。
扉を蹴っ飛ばして村に出れば……、
「マジで……？」
一護に引っ張られているベンが引きつった声を上げる。
宿の外には手に鍬やら包丁やらを持った村人達が待ち構えていた。
「一つ聞きたいけれど……」
ニケがぽつりとつぶやく。
「この村で命を狙われる心当たりある人、居る？」
「ちなみに、ククリと勇者サマはないよ」
「「「「「「「そんなもんない」」」」」」」
ニケとククリの言葉にあたし達は声をそろえてそう答えた。

## 第一章　～一発触発の仲間？　怪しいやつらと危険な村～（後書き）

とりあえず、今日はここまでです。
次回は凶華と一護に活躍してもらおうと思います。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2958ba/

異世界共演乱舞

2012年1月14日21時46分発行